The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	精神科学における基礎付けの概念
Author(s)	溝口, 宏平
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2001, 35, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

精神科学における基礎付けの概念

溝口宏平

一　はじめに――「精神科学の基礎付け」を廻る状況

「精神科学の基礎付け」とは、おもにW・ディルタイのライフワークとなった哲学上の課題を表現するものである。周知のとおり、カントによって自然科学的認識の可能根拠が主観的アプリオリへと超越論的に還元されて以来、とりわけ十九世紀になって、ニュートン的な古典力学をいわばパラダイムとする自然科学は、基盤の確定した学、言い換えれば学のモデルとみなされるようになった。もっとも、その後の物理学、特に二十世紀になって飛躍的な進展をみせた量子力学領域における因果律の崩壊という出来事を考慮すれば、少なくとも当時の自然科学の基礎付けは決して完備したものでも、また究極の基礎付けでもなかったことになろう。しかしいずれにせよ当時、自然科学は基礎付けのいわば完了したものとみなされたのであり、他方、人間の歴史的、社会的営みを認識対象とする、いわゆる精神諸科学は、なお基盤の欠如した無秩序な学とみなされ、それらの学に対して自然科学と同等の普遍妥当性を与えることが哲学上の根本課題と目されるようになったのである。

こうした経緯のなかで精神諸科学を基礎付けようとする場合、当然のことながら、たとえばA・コントやJ・S・ミルのように、厳密な意味で因果律に従うような人間的諸現象に関してのみ学としての精神科学（いわゆる社会学〈コント〉や道徳科学〈ミル〉）が成立するという考え方が生じてくる。しかし、この発想は、精神科学を基礎付けるというよりは、むしろ自然科学の、精神領域への応用と考えるべきである。したがって、自然科学的な合理的普遍妥当性の適用できない現象は、そもそも学の対象とはみなされない。つまり、自然科学の基礎を自らへと転用する精神科学の基礎付けは、既存の精神科学の営みに対して基盤を提供するのではなく、むしろ学の対象領域を限定することであり、一定の限定され、かつ変質した学の理念を投企することといわねばならない。こうしたパースペクティヴのもとでみられた人間の精神的営みは、自然科学特有の一般性の視点からみられ法則付けられる。それに対してドイツロマン主義から生み出されてきた歴史主義の流れは、その相対主義的な、したがってそもそも学としての精神科学ないし歴史科学の成立を危うくする主張にもかかわらず、以上のような人間精神の普遍主義的な見方に対して、個体ないし個性を重視し、個性を把捉し理解することこそ真の人間的学であるとする見方を培った。ディルタイの直面していた歴史的状況は以上のようなものであり、彼は自然科学的合理性と普遍性に解消しえない人間的生の個性的な営みと諸現象を、その一回的な歴史性と社会性のなかで理解し認識すること、そしてその学的営みを哲学というメタレヴェルにおいて基礎付け、精神諸科学に固有の普遍性を確立することを目指したのである。

その場合、基本的に自然科学の基礎付けについては、ディルタイにあっても、新カント学派の西南ドイツ学派と同様、カントの試みを妥当なものとして承認し、その上でカントの遺した歴史諸科学に関する基礎付けを別個に試

みるという方策がとられた。ディルタイが自らの仕事と課題に冠した「歴史的理性批判」という語が、その事情を象徴的に物語っているといえよう。そのため、以後「説明か理解か」という標語に集約されているように、学の二元論が生じることにもなったのである。

しかし、そもそも、なぜ学は、自然科学であれ精神科学であれ、基礎付けられなければならないのか。学の「基礎付け（Grundlegung, Begründung）」とは、いったいどのような意図と目的のもとでなされるものなのだろうか。基礎付けられていない学は、学たりえないのだろうか。また、たとえ基礎付けの要請を容認するとしても、それでは、その基礎付けの方法は、どのようなものでなければならないのか。自然科学と精神科学とが異なった仕方で基礎付けられるのだとするならば、基礎付けの概念そのものが多義化してしまうのではないか。そもそも形而上学の崩壊が叫ばれた後で、なお「基礎付け」の概念自体が有効な意味をもちうるのだろうか。

以下の論究の目標は、不完全かつ折衷的でありながらも、或る現代的な学の基礎付けの可能性を示唆しようとしたディルタイの「基礎付け」の概念と手法の意義を再評価することにある。そしてそれによって「基礎付け」の意味そのものが、ディルタイを通して変貌しつつある状況を幾分なりと明らかにすることが試みられる。

二　学の基礎付け一般の特性

ライプニッツ及びヴォルフの後で、初めて根拠律（理由律）の問題を主題的かつ体系的に取りあげたショーペンハウアーは、学を次のように性格づけている。「学とは認識の一体系を意味する。つまり、認識の単なる寄せ集めとは異なる結合された認識の全体を意味する。」そしてさらに続けて「およそあらゆる学問は、結果がそれによっ

て規定される原因についての知識、またわれわれのこれからさきの考察に出てくるような、根拠から帰結にいたる必然性についての認識を必ずもっている」[1]と。

ショーペンハウアーの指摘に従えば、学とは、その学を構成する知の諸要素の必然的な結合ないし連関の全体であり、その知の結合を可能にする本質的な共通要素は根拠律にあるということになろう。いいかえれば、学が学であるためには、或る特定の領域の知のすべてを統一的ないし体系的にとりまとめる原理を必要としており、その原理によって学は初めて学となる。たとえば、ヘーゲルの場合なら、知の体系性、すなわち学の体系性を可能にする原理は、弁証法的論理であり、またその核となる否定性の原理である。そしてその弁証法的論理そのものを主題的に取り出したものが「論理学」なのである。論理学は、ヘーゲルに従えば、一切の学の原理であり、成立の根拠といえよう。こうした学についての考え方は二〇世紀になっても、なお踏襲されている。

たとえば、フッサールは、学の成立条件として、「理論的な意味での体系的連関」をあげ、そこに「知識の基礎付けと、いくつもの基礎付けが継起していく際の適切な結合と秩序」が存することを主張している。「学問の本質には、基礎付け連関の統一が属している」[2]のである。それは、いいかえれば「真理の体系的連関」でもあり、「無数の真なる命題が真理として把握されるのは、それがなんらかの方法によって基礎付けられる場合だけ」[3]なのである。そしてフッサールは、こうした学の基礎付け作業を、「学問論（Wissenschaftslehre）」と呼び、内容のうえからは、「論理学」とみなした。「基礎付けの諸連関を支配しているのは、恣意と偶然ではなく、理性と秩序、すなわち規整法則」[4]だからである。そして認識の進歩は、すべて基礎付けのなかで成就されるとみなした。もちろんフッサールが念頭においている学問の特性は、「認識の体系的普遍性」であり、その意味で厳密な普遍学という性格が、

精神科学に対しても要求される。彼は「精神の哲学」（精神科学のこと）を基礎付けうるのは、彼の創始した普遍学という本質を担う現象学的本質学だけだとまで主張しているのである。[5] その意味で、フッサールにおいては、学の基礎付けとしての「学問論」は、それ自体として哲学そのものでもある。学を基礎付けることは、諸連関における知そのものの可能根拠を明らかにすることなのであり、その意味で知を根拠づけること、知を原理付けること、それこそ伝統的に哲学の本質的な課題とみなされてきたものだからである。その点でフッサールは、伝統的な学問観のうちにあるといってよい。

ちなみに、「学問論（Wissenschaftslehre）」という語は、フィヒテの「知識学（Wissenschaftslehre）」に由来する語であるが、フィヒテにおける知識学とは、まさしく知の体系的現出の必然性を明らかにするものであり、その意味で、すでに哲学そのものを指示する語であった。そこでは、体系的連関付けと、それを基礎付ける超越論的根拠の定立が遂行されている。いいかえれば、学の基礎付けとしての学問論の理念は、その当初から基本的には広義での形而上学的な体制を前提とする。「広義での」と述べたのは、形而上学が一般に原理上、根拠とされるものがたとえ超越論的主観性のごときものであっても、基礎付けるものと基礎付けられるものとの存在者的な二重の連関構造をもつものであり、その場合原理の超越性は、必ずしも二世界論的構造に依拠する必要はないということに拠る。

しかしでは、そうした「基礎付け」ないし「根拠付け」の思想は、形而上学の根本体制がもはや維持しえないと考えられている現代にあって――その理由は、それほど明確でも簡単でもないが――いったいどのような形態をとりうるのだろうか。

三　「基礎付け」の概念

まず、「基礎付け」の概念そのものについての現代的見解の特質を、論究に必要な範囲内で若干指摘しておきたい。よく知られているように、「基礎付け」の思想のもつ欺瞞性を、その形而上学的・宗教的特性に関してモティーフの面から糾弾しようとしたのは、ニーチェであるが、――もっとも、ハイデガーの解釈に従うと、皮肉なことにその当のニーチェ自身が再び形而上学的体制を背後に前提していたことになる――二十世紀になると基礎付けの思想そのもの不可能性が、その形式的な側面から様々な形で主張されるようになった。

たとえば、後の論理実証主義的な批判の基礎を与えた初期のヴィトゲンシュタインは、文法的かつ意味論的に有意なもの以外には学問的あるいは思考の上での位置価を認めず、したがって有意な表現領域を逸脱する形而上学的根拠について語ることを禁止した。そしてそれは、伝統的な意味での「基礎付け」の思想を哲学領域から排除することを意味したのである。但し、彼自身も認めているように、この思想の全体が哲学の可能性についての基礎付け的役割を果たしていることは、アイロニカルではあるが、一方で基礎付けの思想が、肯定的な場合にも否定的な場合にも同様に作用する、あるいは作用せざるをえないという興味深い事情を示唆するといえよう。とはいえ、後のカルナップに顕著にみられるように、伝統的な意味での形而上学的根拠の定立という意味での基礎付けは、原則上ナンセンスな営みとみなされることになった。上記の批判は、主に言語の語法上の形式的機能に基づくものであるが、思考の論理的な側面から、基礎付けの思想の不可能性を論証しようとしたのは、例のハンス・アルバートであった。彼が批判的合理主義の立場から提示した「ミュンヒハウゼン・トリレンマ」は、極めてポピュラーになった

基礎付け不可能性の論証であるが、一部カントの二律背反の論証形式にも似て、基礎付けの思想の陥る矛盾性格を指摘することによって、基礎付けが原理上不可能であることを論証しようとしたものであった。もっとも、こうした論証の常として、それ自体が自己言及性の自己矛盾に陥ることを避けることはできなかった。しかし、視点を変えていえば、ヴィトゲンシュタインや論理実証主義の場合と同様、基礎付けの不可能性を論証するという逆説的な仕方であれ、彼の批判を学問の可能性を基礎付ける試みの一形態と特色付けることも可能であろう。[6] 基礎付けが、逆説的ないし反照的に遂行されているからである。

こうした逆説的な基礎付けとは異なり、超越論的語用論の立場から、我々の真理要求の事実性を基に「基礎付け」の積極的な可能性を呈示しようとしたのは、K・-O・アーペルである。彼の論証は、内容の乏しい形式的な基礎付け可能性の論証に留まっているが、形而上学的な基礎付けを回避した現代における基礎付け論議がとる方向を代表するといってよい。同様に、形而上学的な基礎付けを回避し、超越論的傾向を帯びつつ新たな基礎付けを目指したのが、前期のハイデガーであり、彼の基礎的存在論であった。前期ハイデガーは、存在の超越論的な基礎を時間に求め、超越論的な時間地平（Temporalität）から存在の意味への問いを立てるとともに、そこから諸学の可能性をも投企することを目指した。しかし、ガダマーも指摘するように、存在の意味が時間地平に還元されるというハイデガーの経験は、そもそも超越論的な立問及び基礎付け思想そのものの不可能性の経験でもあり、思考の転回を引き起こすものであった。ハイデガー的な現象学の立場からいって、基礎付けはもはや不可能であり、基礎付けに替わるものとしては、挙示（Aufweisung）と明示（Ausweisung）が言われうるのみなのである。[7]

では、ディルタイに代表される精神科学の基礎付けという思想は、もはやまったく無意味で不可能な試みになっ

てしまったのだろうか。しかし、たとえば前期ハイデガーの遂行した基礎的存在論は、精神科学のみならず自然科学の可能性も視野に入れた仕方での新たな基礎付けの可能性を示そうとしたものであり、またさらに、ガダマーの呈示した哲学的解釈学は、シュライエルマッハー及びディルタイ以来の解釈学を、存在論的レベルにおいてより普遍化しようとしたものであるという点を考慮するなら、ディルタイによって遂行された精神科学の基礎付けの理念と方向は、現代哲学の可能性を方向付ける可能性をもつものであったといえるのではないだろうか。そうした視点から、以下にディルタイの目指した精神科学の基礎付けのもつ意義を、その問題点とともに指摘しておきたい。

四　ディルタイにおける精神科学の基礎付けの概念の特質とその意義

その後半部（第三部～第五部）が未刊に終わったディルタイの『精神科学序説』は、近年全集第十九巻のうちにそのかなりまとまった草稿が公刊されるに及び、概ね前期ディルタイの基礎付けの思想全体の性格が捉えられるようになった。しかしそこには未だ解釈学を基礎に据える後期思想への道筋は明確になっておらず、その点では彼の基礎付けの思想は、H・ヨーアッハも指摘するように、主体性の哲学の圏内に留まるものであったといわねばならない。[8] もっとも後期の思想、特に全集第七巻に収められた『精神諸科学における歴史的世界の構成』に見られるような生の哲学と解釈学の立場が明確化してきた場面にあってさえ、なお我々は超越論的で主体的な哲学の基盤をディルタイのうちに指摘することはできよう。いずれにせよ、この時期のディルタイの精神科学の基礎付けの思想が、主体性の哲学ないし超越論的哲学的性格を保持していることは、以下の点に明らかである。

まず、ディルタイが精神科学の認識論的基盤を「内的経験（innere Erfahrung）」ないし「意識の事実（Tatsa-

chen des Bewußtseins)」に求めている点を挙げなければならない。[9] ディルタイは、「現実（すなわち一切の外的事実、事物と人物）は、意識の諸制約のもとにある」という「現象性の命題（der Satz der Phänomenalität）」のもとに、一切の学の基礎を置こうとする。[10] その点では、カントによって基礎付けられた自然科学も例外ではない。しかし彼は、この「意識の事実」をカントやそれ以前のイギリス経験論のように「固定的で死滅した」アプリオリとして捉えるのではなく、「生き生きとした歴史的プロセス」として捉えようとする。[11] そしてこうした意識の事実の分析を精神科学の中心的な仕事とみなしたのである。したがって、「精神科学の基礎付け」という課題は、「意識の事実の分析」という学的営みの方法論的構造と、意識の事実を構成する諸要素を、生の生き生きとした、かつ歴史的生成過程の連関のうちで明らかにすることを意味している。ここでの「基礎付け」の概念は、明らかに超越的な根拠によって一切を基礎付ける伝統的かつ形而上学的概念とは異なっている。

たしかにディルタイも、学を次のように規定している。「言葉の用法に従えば、学とは諸命題の総体として理解されるものである。その命題の要素は概念であり、すなわち完全に規定され、全体の思考連関にあって恒常的かつ普遍妥当的であり、その結合は基礎付けられ、最後に部分が、伝達を目標として全体へと結び付けられているような、そうした命題の総体である」[12]と。こうした規定は、先に示したショーペンハウアーやフッサールによる学の規定と形式のうえでは変わりはない。しかし、問題は、学それ自体の、さらには諸学全体を体系的に結合する機能ないし原理にある。この結合原理が、いわば基礎付けの原理であるという点からみて、この結合原理の差異に前二者とディルタイとの基礎付けの概念の差異があるとともに、ディルタイの基礎付けの思想の或る新しさがある。

ディルタイは彼の方法の特色を、学的思考の諸要素を全体の人間の本性から切り離すことなく、それらの間の連

関を求める点に置いている。そして「我々の総体から出発する発展史（Entwicklungsgeschichte）」のみが、こうした連関への問いを遂行する哲学に対して唯一解答を与えるものとみなしている。[13] このことは何を意味しているのだろうか。

たしかにこの時期のディルタイは、具体的な基礎付けの方法論としては、まだ輪郭が明確になっていなかった記述的心理学や論理学を念頭においており、のみならず、後期になってもなお保持される類比的推理や帰納法的思考を採用しようとしている。その限りでは、伝統的ないし形而上学的基礎付けの思想の残滓を帯びている。しかし、他方で固定化を避ける生の発生論的なカテゴリーや類型概念を基礎とする生の全体的連関の呈示をもって学の基礎付けとする特異な傾向をも示している。一切の学が生の表現であり、生の現出形態とみなされる限り、諸学をスタティックに体系化する原理はありえない。原理そのものが歴史的生成過程のもとにあるからである。その意味では、諸学を結合する超越的原理はもとより、超越論的原理も原則上呈示しえないことになろう。のちに解釈学を基礎付けの方法論的基礎に導入することから考えても、学を構成する諸要素と全体との循環的に連関する過程ないし運動そのものの呈示が、あるいはその運動の遂行自体が、同時に学の基礎付け的役割と機能を果たすものと当初から暗黙裡に考えられていたといえないだろうか。

「基礎付け」が根拠を据えることを意味するならば、上記の意味でのディルタイの基礎付けは、もはや基礎付けとは呼びえないであろう。しかし、「基礎付け」が、後にハイデガーが指摘したように、「建立（Stiftung）」の意味をもち、根拠から生きることを意味しうるならば、[14] ディルタイの基礎付けの思想の示唆する方向は、生を生きることであり、追体験することであり、みずからの生を拡大することそのものになろう。そこに、精神科学の基礎付

けと解釈学と世界観学とを結ぶ糸があるように予想されるが、その点についての詳論は別の機会を待ちたい。

註

(1) A.Schopenhauer, "Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde", in; Arthur Schopenhauer Zürcher Ausgabe, Werke in zehn Bänden, Zürich, 1977, Bd.5, S.16.

(2) E.Husserl, *Logische Untersuchungen,* 5.Aufl., Bd 1, Tübingen, 1968, S.15.

(3) op. cit. S.16.

(4) op. cit. S.18.

(5) Vgl. E.Husserl, "Philosophie als strenge Wissenschaft", in;Husserliana, Bd.XXV, Dordrecht,1987,S.47.

(6) Vgl. H.Albert, *Traktat über kritische Vernunft,* 5.,verbesserte und erweiterte Auflage, Tübingen, 1991.

(7) Vgl. H.-G.Gadamer, *Wahrheit und Methode,* Gesammelte Werke, Bd.2, Tübingen,1993, S.446, und Bd.1, 1990, S.261.

(8) Vgl. H.Johach, "Diltheys Philosophie des Subjekts und die Grundlegung der Geistes-und Sozialwissenschaften. Zur Aktualität der 》Einleitung in die Geisteswissenschaften《", in;Dilthey-Jahrbuch, Bd.2, Göttingen, 1984, S.93.

(9) Vgl. W.Dilthey, *Einleitung in die Geisteswissenschaften,* Gesammelte Schriften, Bd.1, Göttingen, 1973, S. XVIIf.

(10) W.Dilthey, *Grundlegung der Wissenschaften vom Menschen,der Gesellschaft und der Geschichte,* Gesammelte Schriften, Bd.XIX, Göttingen, 1982, S.60.

(11) op. cit. S.44. なお、精神の事実と自然の事実との関係については、以下の記述を参照。「精神の事実は、自然の事実の最上位の限界であり、自然の事実は精神的生のより下位の諸制約を形作る。」W. Dilthey, Gesammelte Schriften, Bd.1, S.17.

(12) op. cit. S.4.

(13) Vgl. op. cit. S.XVIII.

(14) Vgl. M.Heidegger, *Wegmarken,* Gesamtausgabe, Bd.9, Frankfurt a.M., 1976, S.171ff.

(文学研究科教授)

bei Dilthey das Darlegen der Zusammenhänge der Geisteswissenschaften, und dieser Gedankengang selbst ist die Tat des Begründens und das philosophische Leben selbst.

キーワード：精神科学の基礎付け　学問論　解釈学　現象性の命題　意識の事実

Über den Begriff der Begründung in den Geisteswissenschaften

Kohei MIZOGUCHI

Diese Abhandlung soll die eigene Art oder den spezifischen Sinn der Begründung (Grundlegung) ans Licht kommen lassen, deren Begriff man vor allem in der Philosophie Diltheys finden kann.

Die Begründung bzw. Grundlegung der Geisteswissenschften bezeichnet, wie man weiß, die Aufgabe der Philosophie Diltheys, um die es ihm während seines ganzen Lebens ging. Nach dem Versuch Kants, die Naturwissenschaft auf transzendentale Weise zu begründen, hielt Dilthey die Begründung der Geisteswissenschaften als das noch ungelöste Problem. Insofern Kants Versuch sich als richtig erwiesen hatte, scheint der Begriff der Begründung auch bei Dilthey denselben Sinn wie bei Kant zu haben. Aber andersseits, insofern Dilthey den kantischen Begriff der apriorischen Kategorien ablehnt, gibt es zwischen beiden in bezug auf den Charakter der Begründung einen großen Unterschied, der sich aus der philosophischen Stellung beider herleitet.

Nach traditioneller Lesart bedeutet die Begründung der Wissenschaften folgendes: für die Wissenschaften ein einheitliches Prinzip zu schaffen. Aber in den Geisteswissenschaften kann es nach der Philosophie Diltheys kein stetiges einheitliches Prinzip geben. Denn das Prinzip selbst ist in den Geisteswissenschften lebendig und veränderlich, d.h. genetisch. Also kann man in dem diltheyschen Begriff der Begrüngung einen eingenartigen und neuen Charakter der Begründung finden. D.h. das Begründen der Geisteswissenschaften ist